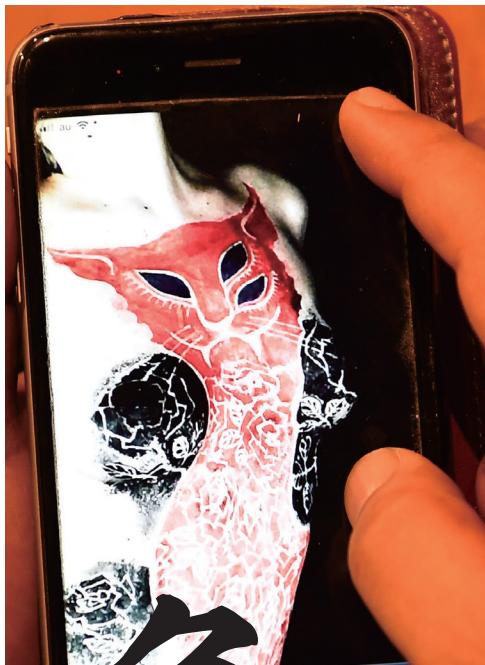


本人の希望で猫を描いたボディーペイント

ひいき筋が作ってくれた作務衣に身を包んで
「これ、いいでしょ」とご機嫌の東學さん

ル 晴
デ レ

色とアシングラ 画狂人

絵師の東學さん(55)は、若い頃から芝居のチラシを作りたかったそうだ。

アメリカから帰ってきて、イラストレーションの専門学校に入るが、「イラストって、人に言われて描くんだ。それ嫌やな」と悩み出した時寺山修司の芝居のチラシを見て「こんな作りたい」と思ったという。

それから何年かあと、今はなき大阪の小劇場・扇町ミュージアムスクエアで上演される芝居のチラシを初めて作った。アサヒ精版印刷の先代、「パパ」こと築山敬志朗さんに印刷を頼んだ。「この紙でやりたい」「めっちゃ高い紙、頼むのう」。20万円の予算から、紙と印刷代で19万円が飛び、自分のギャラはわずか1万円だった、と學さんは笑う。

ギャラは少なくとも満足いくモノを作りたい、というのは、アサヒ精版印刷や出入りするクリエーターさんに共通している『本能』のように思える。

若い頃の話をもう一つ。コピーライターの村上美香さんとデザイン会社を設立したはいいが、トラブルで会社をつぶす羽目に。その後、「株式会社一八八」で再起を図る。ミナミのわずか6坪の元スナックを借りて。「150円しかないから、会社に泊まって」。湯沸かし器の横にマックのパソコン置いて、仕事しまくった。「このマック、湯沸かし器で動いてるんちゃう? 言いながら。半年でマック壊れたけど、何百万かの借金返した」

そんな學さんがいま、どんなことをしているかというと……ボディーペイントだ。英語で言うとアートっぽく聞こえるが、要は女性の体に絵を描いているのだ。何を思って? 「趣味ですよ。描いてって来るから。ダンサーや主婦が」。誰でもいいわけではない。35歳以下でギャラなし等々の条件がある。

4、5年前から始めて、自分で写真を撮りためており、「写真集出そうかな」と考えている。今まで150人以上、200点ほどの作品ができた。絵のテーマは相手の希望を聞く。描き上げるのに数時間はかかり、終わったらグッタリするが、描いてもらった方は元気になる。

「セラピーにもなってる。借金背負わされてヌードモデルしてた子には、虫に食われる絵を描いたし、ストーカーされてた子には、まとわりついてるもんを描いたると、カタツムリがはい回ってる絵にした。泳げない子には、人魚にしたるわと」

シャワーを浴びて絵を落としたら、みんな「スッキリした」と、つきものが落ちたように帰っていくそうだ。學さんにしかできない芸当だろう。

「平成の浮世絵師」とメディアからは呼ばれるが、「僕自身は別に……」とそっけない。ただ、葛飾北斎は大好き。北斎の話になると、途端に目が輝く。「100歳まで生きたら、もつとうまく描けると言った北斎はカッコいい。それにスケベ。北斎が描く女の顔が、一番ベっぴん!」。北斎のその辺が『画狂人』と呼ばれたゆえんで、學さんに通じるやん。

その上、禅問答ライブペイントにしてもボディーペイントにしても、そして學さん自身からも、アングラーのにおいがふんふんと漂っている。